

衝撃！前世療法・ヒプノ体験記

ヒプノ体験は妄想か真実か？

前世療法を繰り返し、

体験した神秘体験の数々

はじめに

これは私が10年間の間に繰り返し受けてきた
前世療法・ヒプノの体験記です。

今までにヒプノセラピストの方々が出された本は
何冊も発表されてきたと思いますが、
クライアント側が発表した体験記というのは、
あまり無かったように思います。

私がこれを書いて発表したいと思ったのは、
自分が体験して感じたことと
セラピストさんがそれを脇で見て思ったこととの

ギャップがあるように感じたからです。

ヒプノでクライアントがどんな体験をしているか、
何を見たか、何を聞いたか、
その本当の所はセラピストには
わからない部分があると思います。

なぜなら、それを真に体験しているのは
クライアントだからです。
そしてセラピストはセラピストの価値観でしか
それを判断していないからです。

私はヒプノを通して驚くような体験をしました。
それを誰のファクターも通さずに、
体験のそのままを発表したいと思いました。

「私」という意識はどこからくるか

みなさんは「私」という意識は
どうしてあると思いますか？

「あなた」っていったいなんでしょう。

私は物心つくころから、
それが不思議でしょうがありませんでした。
どうして「私」は「私」なんだろう。

どうして「私」は
「あなた」ではなくて
「私」なんだろう。

「あなた」と「私」は、
なぜ違う人間なんだろう。

それは私が幼稚園のころからの疑問でした。

その疑問は私の中でいまだに
完全には解明されていません。

でも、「私」は
「今の私」ではない時代があった、
と言ったらどう思いますか？
そう、いわゆる「前世」といわれるものです。

私は中学生の頃、
よく「生まれる前は私はどこにいたか」
ということをよくよく考えていました。
友達にそういと、驚かれた反面
「そういえば、どこにいたんだろうね」
と返してくれて、
それがなんだか嬉しかった記憶があります。
なぜなら、その疑問は家族に言っても
まるで取り合ってもらえず、
こんなことを考える私のほうがおかしいのかな、

とっていたからです。

前世療法

私がある日、前世療法というものを知ったのは
10代頃にみたテレビ番組ででした。

その番組の中で催眠術師に催眠にかけられた人が、
自分で自分の前世をはっきりと克明に見てきて、
名前も国も語り、どんな生活かを語り、
どんな風に死んだかその場面までを見てくる、
それがどうやら歴史的事実と一致しているようだ、
という話にびっくりしてしまいました。

私はそれを食い入るように見て、
ずっと忘れられないでいました。
私がブライアン・ワイズ博士の書いた
「前世療法」という本に出会ったのは
それから随分後のことでした。

その本は、大変に面白く、
人生ってこんな風にできていたのか。
不思議だなあと思いました。

私はその時に、
絶対にこの前世療法を受けたいと思いましたが、
当時、前世療法をやっているところは

日本ではどこにもないという話でした。
残念でしたが、
あきらめるより他ありませんでした。

初めてのヒプノ体験

だんだん時代は変わってきて、
ネットが普通に使えるようになってきました。

そんなある日、
私は何気なくネットサーフィンしていると、
昔あこがれていた前世療法が
日本のあちこちで行われていることを知りました。
その中で、縁を感じたセラピストさんがいて、
私は意を決して前世療法を受けにいったのです。

「一回、3万円もするのかあ、高いなあ。。」
と思いつつ、
私は自分の好奇心を抑えられず
セッションに向かったのです。

お部屋に入ると素敵なセラピストさんがいて、
いろいろな話をしてくれました。
でも私はあまりその話には興味がなく、
早く前世を見せてくれないかなあ
とっていました。

セラピストさんは

「すぐに見れない人もいるのですが・・・」
と言っています。

でも私はその頃、瞑想などを
毎日の習慣にしていたので、
きっとすぐに見れるような気がしました。

「では、はじめましょう。体を楽にしてください。」

とセラピストさんが言うと、
何やら紙を取り出して読み上げます。

「それではゆっくり深呼吸をしてみましょう。
吸ってえええ～、吐いてええええ～。」
私は深い瞑想状態に入っていました。

「あなたの足をみてください・・・」

前世が見えた！

そこにははっきりと私の足がありました。
現世ではない前世の自分の足。
私は裸足で石の床の上に立っていました。
それは私にとって驚きでした。
まさか！という気持ちでした。
あまりの驚きで少し泣いてしまいました。

私はセラピストさんに伝えます。

「私は、裸足で、床の上に立っています。。。石でできた、塔のような薄暗い建物の中にいます。」

だんだんと周りの様子がはっきりとしてきます。

「ここはたぶん、イスラム教の塔の中です。塔の中には何人か人がいます。私の近くに数人の大人がいます。私は8歳くらいの女の子で麻の服を着ています。塔の中は何となく緊迫した空気が流れています。」

塔の外を見ると、外は戦争の真っ最中でした。壊れた物が散らばっています。倒れた人がいます。

「ここは、ポルトガルとスペインの国境近くの町です。今、戦争中です。私たちはここに逃げ込んだのです！隠れています。でもいつ見つかるか・・・」

すると、塔のてっぺんで誰かが大きな声で怒鳴りはじめました。

「十字軍は今すぐここから出ていけえええ！」

私たちは敵陣に見つからないように
ここに逃げ込んだのです。
まさか大声で挑発するなんて、
なんてことする人がいるんだらう。
私はドキドキしながら塔の上に駆け上がると、
そこでは男の人が大きな旗を
振りまわしながら怒鳴っていました。

「ここはお前らのくる場所ではない！
今すぐに出ていけえええ！」

彼の様子はもう怒りで
煮えたぎっているようでした。
私は彼の顔を見ようと、周りこみました。
そして顔を見た瞬間、
私は驚きで心臓が跳ね上がりました。

そこで怒鳴っていたのは、
私の今世の夫だったのです。

私は前世では小さな女の子で、
ただ茫然と世界の成り行きを見ていました。
塔の下には十字軍の兵士たちが、
怒鳴っている彼を見上げています。
私たちは見つかりました。
すぐに十字軍たちが塔に登ってきて、
彼は捕まりました。

それでも彼は怒りを満々にして
敵に屈する様子を見せません。
ここで私たちは殺されるのだろう
とっていたのですが、
私はすぐに他の大人の人に連れて行かれて、
その後の彼の成り行きを見ることは
できませんでした。

私は敵国につかまり、殺されはしなかったものの、
いろんなショックのために精神的にぼんやりと
その後の人生を過ごしました。

ただ、胸の中にあったのは
「あの人はあの後どうなったんだろう。」
という思いだけでした。

それだけが、私の中にありました。

なぜか無性に泣ける

私は前世を見ながらずっと泣いていました。
悲しいから泣いてるのではないんです。
ただ無性に泣けるのです。
ハートチャラが振動して、
そしてどうしても泣いてしまう
という感じでしょうか。
ハートがジンジンして、

それは悲しいとかではなくて、
例えるなら、
昔の写真を見ながら
何故だか無性に泣けるというような、
そんな感じです。
感慨深さで泣けてしまうという感じです。
感情ごとどっぷり入ってしまっているので、
泣くか笑うかしないとられないのです。

ですが、私が泣いてるとセラピストさんが

「どうしました？大丈夫ですか？
この場を離れましょう。
浮かびあがりますよ。」と、
なにかと有無を言わず、
すぐその場から引き離されてしまうのです。
きっと、あんまりクライアントが感情的になるのは
よしとしないのだと思いました。
ですが、自分ではどうにも
コントロールできないのです。

本当はあの場面をもっと見たかった。
あの場面にもっといたかった。
そんな思いが私の中にはありました。
ですが、私は自分の前世の一部が見れたことに
大変満足しました。

今生での理由が少しわかった

私はその前世をみて、
私と夫との関係が少し理解できました。
理解できたらいろんなことが
とても楽になりました。
前世での私は、
その後の彼がどうなったのかが知りたかった。
その思いはとても強いものでした。
だから私は今回、
この人と結婚したんだな、と思いました。

私はその頃、
「なぜ夫と結婚したんだろう」
と悩んでいました。
夫とは結婚して5年くらいたっていました。
私たちは特に恋愛して結婚したというわけではなく、
そろそろ結婚しようかなと思った時に
たまたま身近にいて、
相手も結婚相手を探していた
という理由だけで結婚したのです。
私が彼に「結婚してくださいませんか？」
と尋ねると、
「いいですよ」と即答してくださいました。
それまで、手も握ったことのない関係でした。
でも、私たちはまるで

前世から知っているかのように、
いろんなことが同じでした。

彼の家に行くと、
これは私の本棚ではないだろうかと思うくらい
同じ本が並んでいました。

エドガーケーシーの本。

サイババの本。

仏教の本。

瞑想の本。

驚いたことに、どうやら出会うよりも何年も前、
同じ日にローリングストーンズの
コンサートに行っていたことも
判明しました。

そして同じころにマハリシヨーギの
TM瞑想スクールに通っていたことも判明しました。

私は池袋センターに通っていて、
彼は別のセンターに通っていたようです。
私たちは違う場所で違う時間を過ごしながらも、
何故だか似たようなことに興味を持ちながら
生きていたのです。

しかし私はその頃悩んでいたのです。

なぜ結婚したのか。

それは私たちが恋愛して結婚したのではないという
「ツケ」のような感じでした。

互いに関心も興味もない。

似た者同士で違和感はないけども、
互いに関心がない。

彼はいつも仕事のことで頭がいっぱいでしたし、
そのストレスを私にぶつけていました。
彼は少し変わった人で職場でもどこでも浮いていました。
そして他人に厳しい人でした。
私はいつも怒鳴られていましたが、
私は彼がイライラしてようと怒鳴ろうと
まったく意に反さない性格で、
淡々と家事をしていました。
私の家事は私としては完璧でした。
彼が私のことなど
まったく好きでもなんでもないことは
十分わかって結婚したものの、
時々それが私の心の渇きとなりました。
でも、外見的には何の問題もなく、
私たちは互いに似たようなことに
関心を寄せながら生きていたのです。
ですが、私はこのポルトガルでの前世を見た後、
何かがとても吹っ切れた気がしました。

今のこの人生は問題なく
自分の意図した通りに進んでいる
という気持ちになったのです。
どこも間違っていないし、
何も選択ミスはしていない

と思えるようになりました。

縁があったから結婚したんだ、
これは必然だったのだ、
と思えるようになったのでした。

人は、人生で進学や就職、結婚などを選択した時に、
なぜこれを選んだのだろう、
と後から思うことは多々あるのではないかと思います。
そして自分が間違っただけを選択をしたのではないか、
と思うことは大変な苦悩だと思います。

もし、あの時、他の選択をしたら・・・
私はもっと幸せだったかも・・・。

現実的には永遠にやってくるはずのない
「もし」を抱えて生きることこそ、
不幸なことではありません。
私はその「もし」から解放されたのです。
それはポルトガルでの少女だった私が抱いた気持ちを
リアルに体験したせいでした。

「この人がこの後どうなるか知りたい。」

私はその気持ちを一生思い続けて生きてきました。
それはとても強い強い気持ちでした。

私はその思いの続きとして、
今のこの結婚生活を選んだことは
何も間違っていなかったと思えたのでした。

私はその後も興味のままに
いろいろな前世を見ていきました。
スイスでの前世。タイでの前世など。
それはその時に考えていること悩んでいることに
フィットするようなものでした。
それぞれに気づきがありました。

「今の自分」というものを離れて、
離れながらも今の自分が行き詰っていることを、
前世体験という方法で、
一連のストーリーとして感じ、
また死後の世界まで行き
自分のハイヤーセルフからメッセージをもらってくる、
というこの方法は、
おそらく心理学的にも
大変な効果があるだろうと思います。
心理学的な精神的効果について書かれている
ヒプノの本はたくさんあります。
単純に自分を客観的に見ることで
わかることはたくさんあると思います。

でも、私が次々に前世を見ていった理由は、
精神的に楽になりたいと思ったからではありません。

最初にも書いたように

「私」という意識がどこからくるのか、
その理由を知りたかったからです。

印象的な体験・革命家エリック

それから数年たってから、

また私は別のセラピストさんから
セッションを受けました。

その頃には私は夫との関係に悩むなどということは
まったくなくなっていました。

そんな悩みがあったことすら忘れていました。
完全に手放した、とっていい状態でした。

今回は私は自分自身の可能性を探りたくて
前世療法を受けてみようと思ったのです。

私はごく普通の主婦でしたが、
何かもっとできることがあるような気がしていました。

そこで、

私が一番活躍したと思われる前世に誘導してもらいました。

セラピストさんが誘導を始めると、
すぐさま私は前世体験をはじめました。

自分の足元を見ると、石畳の道の上に、

凝った装飾の革のブーツが
実にリアルにそこにありました。
それは感動的でした。

確かに私はこの靴をよく知っている。
これは私の靴だと思いました。

そしてあまりの懐かしさに
私はおいおいと泣きだしました。
またもや私はその前世の世界に
感情ごとどっぷりと入ったのです。
そんな私にセラピストさんは困惑しているようでした。

「どうしましたか？この場を離れましょうか？」

「いいえ、悲しいわけではなりません。
このまま続けてください。」

目線を上げていくと
私は青く美しいヨーロッパの貴族が着るような
男性の服を着ています。
綺麗な刺繍が懐かしさでいっぱい、
私の心を揺さぶりました。
白い手袋をして腰にサーベルを刺しています。

「私の名前はエリック。ここはイギリス。
私は革命を起こさねばなりません。」

この世を変えなくてははいけません。
人々は苦しんでいます。
このような政治は変えなくてははいけません。」

私はこの前世で革命家でした。
私は自分がやらなければならない
使命のようなものを感じていました。
この世を良くしたい、
人々がもっと過ごしやすい世界を作りたい。
それは私の悲願のようでした。
私の呼吸は早くなり叫んでいます。

「仲間が・・・！」

「それではすこしその場を離れましょう。」

どんどんと前世の世界に引き込まれていく私を、
セラピストさんはあわてて連れ戻すかのようでした。
あまりクライアントが興奮してしまうと、
収集つかなくなると思うのだと思います。
この人生は革命という目的をかなえるために
ひた走りに走った人生でした。

その中で、私は群衆の力、
時代に翻弄されて生きる人々、
時代のうねり、
人々のうねりのようなものに圧倒されていました。

時代の中で個人は無力だ、と感じました。

「この人生のテーマはなんだったと思いますか？」

とセラピストさんは聞きました。

「決断したら、行動する。」

でも、その行動は空回りであったり、
誰の役にも立たないことがたくさんあったような気が、
うすぼんやりとしました。

私はこの前世を見て、
いろいろ気になることがたくさんありました。

「あの後、あの場面はどうなったんだろう。
あそこで出てきた、あの人はなんだったのだろう。」

もっと見たいと思う場面も、
セラピストさんの誘導で
他の場面に連れて行かれてしまい、
私はなんとも言えない不完全燃焼のような
もどかしさが私の中でくすぶっていました。
何かあるけれども、
それは前世という見えない壁のもとで、
容易に意識に登ってくる事ができないでいました。

それはずっと後になって、

明確に思い出することができるのですが、
その時はそれができずに、
私はもどかしさでいっぱいでした。

「あの場面のある後、絶対に何かがあったはず！」

その思いは私の潜在意識の中でどんどん張らんでいるようでした。

原生林で暮らすサ

ある時はこんな前世をみました。
私は原生林に住む原住民で、
浅黒い肌に腰巻のようなものをして、
頭には鳥の羽のようなものをつけています。
顔にペイントしていて、
木の上に家を作って住んでいます。
私の名前は「サ」。
30人くらいで一緒に生活しているようでした。
狩りをしたり、
呪術をしたりしてくらしています。

そんな暮らしの中、
ある時衝撃的な事件がおきます。
仲間が殺されて内臓をえぐられて
木につるされています。
衝撃的な光景でした。
これは警告のようでした。

なにやら私たちはここから出ていけと
何者かに言われているようでした。
ですが、私たちは戦うことを選択し、
そのコミュニティは壊滅したのです。

私はこの前世を見て、
世は無常である、と思いました。

そして人は屈するよりは戦い、
従わなくてはならないなら死を選ぶ。

それを魂に刻まれたDNAのように
感じ入ったのです。

中国の羊飼

こんな前世もありました。
私は中国の埃っぽい町に住んでいて、
男性でした。
貧しいけれども幸せな家庭に育ち、
私はそろそろ結婚したいと思っています。

あるとき町ではお祭りがありました。
裸馬にのって乗り方を競うというお祭りです。
私には好きな女性がいました。
このお祭りで裸馬にかっこよくのって、
そのあとにプロポーズしようと思っていました。

ドキドキしながら
自分が馬に乗る順番を待っています。
女性は約束した通りに見ていてくれています。
私の番になりました。

「えいさ！」

と掛け声よく乗り込んだのはいいけれど、
それこそあっという間に落ちてしまいました。
その様子が滑稽だったようで、
見ている人がみんな笑っています。
私も照れてわらいました。
女性も笑っています。
でも自分はこれでプロポーズをするんだと
意気込んでいました。

場面が変わって、
私はひどく落ち込んでいました。
女性はほかの男性と結婚してしまったのです。
思いどうりにならないことってあるんだな。。
と思っています。
その後しばらくしてから
私はほかの女性と結婚しました。
その頃、私は羊を追う仕事をしていました。

ある日、いつものように羊を追っていたら、
私は誤って崖から転落してしまいました。

あっという間の出来事でした。

崖の上で私の犬が
私を見下ろしているのが見えました。
とても心配そうに見ています。
その時、
何ともいえない気持ちがしました。
私は犬に心で語りかけました。

「心配はいらないよ。
家族に伝えてほしい。
ちょっと間違っ落ちてしまったって。」

私は犬をととても愛おしく感じました。
今までに感じたことのないほどの
愛おしさでいっぱいでした。
私は、
悲しいわけでも、
苦しいわけでも、
残念なわけでもない。

とても静かな安堵感と感動が
入り混じったような気持ちでした。
広大な自然の中で
自分が大地に溶けていくような気がしました。
このまま時間が止まってもいいなと思いました。
このまま

この空間にただ広がっていたいと思いました。

悠久の大地に自分が溶けていくことの幸福感が、
私の中にひろがっていました。

私はセラピストさんに、伝えます。

「人はこうして生まれて死ぬ。
ただ、花が咲いて散るように、
この世に表れては消えていく。
そのサイクルに私はただ身をゆだねるばかりです。
命がけで、身をゆだねるばかりです。」

私はそのまま死にました。

私はその頃、一つ前世を見るたびに、
人間の一生のありがたさ、
美しさ、
それらに身がよじる思いがしました。

私は私であって私ではない。

それを体感するたびに、
「私」という自己は拡大していき、
この世の細かなつまらないことは
どうでもいいと
思えるようになってきたように思います。

その他の前世

私はその後、
馬車職人の前世、
石切り職人の前世、
イギリスでペストで死んだ少女の前世、
などなどを見ていきました。

馬車職人だった私は、
カッコいい馬車を作って
高い値段で貴族に売るのを
とても楽しんでいました。

石切り職人だった私は
従業員を何人も雇っていて
それを運営することに一生懸命でした。

ペストで死んだ少女の前世は
出てきた年代が
史実とぴったり合っていたのが印象的でした。

ペストで死んだ少女

私はロンドンに住んでいて、
おばあさんと数人の男の人と住んでいました。

おばあさんは
馬車のタクシーのようなものを経営していて、
その運転手の人たちがいつも家にいました。
馬車はロンドンの広場に何台も待機しています。
その馬車の待機場所の横で私は遊んでいました。
いつも一緒に遊んでくれる女の子がいて、
私はその子が大好きでした。

「年代はいつですか？」
とセラピストさんが聞きます。
私の中には根拠はないけれども、
確かな確信のようなものがふっと湧いて答えます。

「今は1654年です。私は7歳です。」

15歳の時、私はその大切な、
たった一人のお友達が
遠くの町へ引っ越してしまうことになりました。
私はとても悲しかった。
引っ越すのを見送ったその時の光景が
忘れられませんでした。
隣町へと続く一本道を
馬車が遠くなるまで見送りました。

その時の木々のざわめき、
空気のおい、
光。

すべてが悲しみに彩られていました。

私は残され、一人たたずみ、
流れる涙を止められず、
「これで独りぼっちだ」と思いました。

孤独になった私はその後、
その友達が近くにいないのに、
ずっとテレパシーのようなもので
会話を続けてる気持ちで生きていました。

それだけが私の心のよりどころのようでした。
私は18歳で死にました。
町にペストが流行して
私はぼろ雑巾のように道で死にました。

私はこのセッションが終わってから、
よくよく調べてみました。

1654年の時に7歳だったということは、
18歳のときは1665年です。

それはロンドンでペストが大流行した年でした。

「これは、本当のことだったんだ。」
私は感動しました。

そして、
その頃にタクシーのような馬車があったのだろうか、
と思い後から検索すると
1625年からロンドンでは
辻馬車というのがあったそうです。

「やっぱり本当のことだったんだ。」

そしてさらに不思議だったのが、
この前世での友人が、
私の今現在の友人の一人であるということを
ハイヤーセルフに告げられたことです。

その友人と私はブログで出会いました。
彼女は三重県に住んでいます。
毎日のようにネットを介して
会話しているのにもかかわらず、
私たちは今生では一度も会ったことがないのです。
それは前世で離れながらもずっと
テレパシーで会話している気持ちになった
その様相をそのまま
今生も続けているかのようです。

エリック再び

私はその頃、泣こうが叫ぼうが
最後まで付き合ってくれる
セラピストさんにであってました。
前のような不完全燃焼のセッションではなく、
自分が見たいもの体験したいことを
最後までつきあってくれて
誘導してくれるヒプノセラピストさんでした。

私はセラピストさんに事前面談で
最近の生活での
気になる自分について説明していました。

「私、なぜかいつも時間がないと思うんです。
よくよく考えれば
そんなに時間がないことはないのですが、
もうお昼だ、もう2時だ、もう5時だ、
と言っては次にやらなくてはいけないことが頭によぎり
その準備をしていないことで焦ってしまう。
いつもいつも時間がないと思っているんです。」

そんな私にセラピストさんは
「では今日はその時間がないと
思う原因となった前世に行きましょう。」
といました。

すぐに私は前世の大地を踏みしめていました。

「あ、ここは。。。」

私は驚きました。

それは私が以前に体験した
イギリスでの革命家だった前世の大地に
再び立っていたのです。

と同時に私は叫んでいます。

「時間がありません！！！」

私の呼吸は激しくなり、
セラピールームの椅子の上で
のたうちまわっていました。

「革命です！革命をおこさなくては！
今は1832年！
イギリス！
民衆はこのままでは貧しいままです。
飢えて死ぬばかりです。時間はありません！
私はやらなくてはなりません！」

あとから前世を検証して
歴史的な史実と照らし合わせたところ、
私はイギリスのチャーティスト運動と

関わっているようでした。

私は受験で日本史を選択していましたが、
世界史についてはほとんど知識がありませんでした。

私にはイギリスの知識は何もなかったのですが、
私の見た前世と
歴史的史実はとても似通っていました。

私はこの世を変えたいと思い、
仲間とともに活動していました。
教会の嘘に私は飽き飽きしていましたし、
司祭に対しては
憎しみに近い感情を抱いていました。
彼らは現実が見えていないのだと思いました。
苦しむ民衆を助けたいなどと、
これっぽっちも思っていないと思いました。

民衆の不満はつのにつのに、
暴動が起きました。
群衆は真っ黒い夜の海のようにうねりながら
町に集結し私はその群衆を指揮する人たちの中にいました。

私は叫びます。

「自由を！ 私たちに自由を！！！」

その後、私は投獄されました。

牢屋の中で体中が重くて痛い。
高いところにある窓に止まった小鳥を
ぼんやりと見ていました。
その後、私は家族のつてのようなもので
牢屋から出されました。

私は、その人生を終えて、
あの世へと向かいました。
あの世では私を待っていてくれる存在がいました。
私のハイヤーセルフと呼ばれる存在です。

「お疲れ様。」

とって迎えてくれました。

私は彼らから、
いつものように、
よく聞くようなメッセージをもらっていました。

「人生を楽しみなさい。
喜びに満ちてそこにありなさい。」

それはいつも、
スピリチュアルな本に書かれている教科書のような
言葉の数々でした。

また、そんな言葉なのか。

と、心のどこかで思いながらも、
それでも
その言葉を実感こめて聞く体験は貴重で、
ただ本で読んだり、
人から聞くのとは違った感慨があります。

なんといいいますか、
言葉の伝達度が深い、
とでもいいでしょうか。

魂の奥で
その言葉を受け取る感じがするのです。

でも、あまりに教科書のようなメッセージは
実際のところは抽象的すぎて、
すぐに役に立つというふうではないことが多いのです。

そんな言葉を受け取りながら、
セラピストさんの誘導はメに入ってきました。
もうそろそろこのセッションは終わりです。

突然の体験

いつものように解催眠の準備として
セラピストさんが言います。

「それでは、あなたは二十一世紀、この現代、
谷原由美さんとして生まれてきてます・・・」

「！！！」

その瞬間にパーン、
と私はまったく別な次元に入り込んでいました。

私の周りでどっと笑いが起こりました。

数人の人が私の周りについて、
みんなお腹を抱えて笑っているのです。
そして私の周りの存在たちが、こう言いました。

「谷原由美さんとして生まれてきてる？
そりゃ、大変だなあ！」

びっくりしました。
私の周りにこんなに近くに人がいるとは
まったく予想していなかったからです。

それは7～8人だと思います。
彼らが笑うと私も心から面白おかしくて、
一緒に笑いました。

私は宇宙船のような丸い円盤型の何かに乗っていて、
そこから地球を見下ろしていました。
その中に仲間と一緒に乗っていました。
私はこの映像を
セラピストさんに話すべきか一瞬悩みました。

ですが、その頃には
もう理性などというものが吹っ飛ぶほど
深い意識状態に入り込んでいて、
この映像が始まったと同時に私の呼吸は激しく、
過呼吸状態となっていて、
もう肺がパンパンでした。

私は話すのがやっとという状態の中で
必死にセラピストさんに伝えていました。

「私は円盤のような物体に乗り込んでいます。
周りにたくさんの仲間がいて。。。
地球を見えています。」

円盤型の物体の下には
「プリアーダス星団」と書いてありました。

私は宇宙人の話は
まったく信じないタイプでしたから、
これが何のことなのか
まったくわかりませんでした。

セラピストさんにどうこたえていいかわからず、
でも何か言わなくてはいけなくて

「私の名前はプリアーダス！！」
と答えていました。

「地球は進んでいます。
どこかに向かっています。
私はそれを見えています。
私は
あそこに行かなくてはいけません！！」

私の呼吸は激しく、
息絶え絶えに話します。

どうやら私は
この地球に
やってきたときのビジョンを見ているようでした。

私の周りにはいる仲間達と言います。

「あんなところに行くの？やーめときなよー。」
みんなげらげら笑っています。

私も一緒に笑いました。笑いながら泣きました。

「行きたくはないんです。行きたくない！」
私は号泣していました。泣きながら叫びました。

「でも、行かなくてはならないんです！！
私は行かなければいけない！！」

もう誰も笑いません。
一緒に泣いているかのようでした。
みんなも同じ気持ちという感じがしました。

私の人格は、このころから宇宙生命体でありながら、
革命家エリックでもあり、
現実の谷原由美でもあり、
馬車職人でもあり、
中国の羊飼いであり、
原生林の'サ'でもありました。

どこまでも自分でした。

すべては私の中にあり、

時間も

人格も

すべてが同時にそこに存在していました。

私の呼吸は大変早く、

もう肺が広がりすぎていて、

過呼吸の状態でした。

私はいつも圧倒的なビジョンを見るときには

この状態になり、

この圧倒的な状態で、

私は自己を超えていく体験をしていくのです。

私は、荒い呼吸のまま、

今までのたくさんの

自分の過去生を反芻しながら言いました。

「私は忘れていました。

何故、地球に来たのか。

忘れていたんです。

地球人の手は重くて、重くて、、

とても使い物になりません！！」

私は叫んでいました。

「私たちの手はこんなではなかった！。。

でも、この手が面白くて、

この使い物にならない、
こんなに不器用な地球人の手が面白くて・・・
面白くて・・・
私は手を使うことにあけくれました。」

それは私が石切り職人だったり、
馬車職人だったりしたことや、
私が今生の今までの人生を
ピアノを弾くことばかりに
時間を割いてきたことを、
悔いているようでした。

「私がここに来た理由は
そういうことではないんです。
自分の使命をこれからやらなくてはいけない。
私は忘れていたんです！！」

私は自分がこう語りながらも、
谷原由美の意識では、
一体何をしなくてはならないのかが
わかりませんでした。

ただ、何かするべきことがあるんだな、
と思ったのでした。

私の目の前には
地球がぽっかりと浮かんでいました。
地球がどくどくと鼓動しているのがみえました。

地球は意志をもっていて、
どこかに進もうとしているようでした。

その姿が美しくみえました。
それは嬉しくもあり、
楽しくもあり、
怒りでもあり、
哀しみでもありました。

そうした感情の極致であるように感じました。

その極まった姿は、
ただただ究極的に美しく、
私の心を激しく揺さぶりました。

「地球は、、、
どこかに進もうとしています・・・」

催眠から覚めた時、

ヒプノセラピストさんの困惑した表情で、

「何？そんなのみちゃって。」
というような態度をとりました。

壮大なビジョンを見たときに、
それを他人に話すと、
たいていの人是不快な様子を表しました。

なぜでしょう。
人は小さくつまらない存在であったほうが
安心なのでしょうか。

しかし私たちは、
たくさんの前世をみて、
時代を超え、
場所を超え、
そこに存在した自分という
リアルな体験を積み重ねていくと、

ある日ある時、より大きな自己というものに
だんだんと繋がれるようになってくるのだと思います。

そうするとビジョンは限りなく壮大になってきます。

それは今現在の
「私」という存在しか知らなかった私では

考えられないような
大きな視点を持つからだと思います。

そんな壮大なビジョンを見たからといって、

鼻持ちならないような
尊大な人格になるわけではありません。

むしろ、本当の意味での自己と
本当の意味での他人の姿が
理解できるようになるのです。

それを知っている人は
真の意味での謙虚さを
身に着けるのだと思うのです。
それは世間的な体裁としての謙虚さとは
全然違うのです。

ヒプノは単に心理学として、
現在の悩みを解決するためとか、
恐怖症を治すとかいった
効能ばかりがいわれませんが、
ヒプノの本当の効能はそこではないと思います。

ヒプノの本当の意義は
「より大きな自己につながるツールだ」
ということです。

では、より大きな自己とはなんでしょう。
なんなのでしょう。

プリアーダス星団？

この体験をしたあと、私は帰宅してから、
プリアーダス星団ってなんだろうと思い
急いでネット検索しました。

すると「プレアデス星団ではありませんか？」
という表記とともに、
たくさんのサイトが検索されました。
私はびっくりしました。

「え、本当にあったのか！」

スピリチュアルな世界に詳しい方なら
プレアデス人とかプレアデス星団とかは
よく知った話なのかもしれませんが、
私は初めて見聞きする世界でした。

あまりに驚いて、何人のか人に話したのですが、
どの人も

「とうとう谷原はおかしくなってきた。」
といった反応でした。

私はこの後しばらくしてから、
この時に見たUFOの
本当の正体を知ることになるのです。
ですが、この時はただただ驚き、
一体、自分が何を見たのか
よくわからないままでした。

次のセッション

私は
エリックの前世体験の興奮も冷めやらぬまま、
次のセッションを受けました。
私は海辺で遊んでる少女でした。
ここはフィリピン。
南国の美しい海が広がっています。
私の家は海の近くで
お父さんやお母さんやおばあちゃん、
たくさんの兄弟たちと一緒に住んでいました。
私はセラピストさんの問いかけにも
まるで幼い少女のように甘えた声で

「大人の方がおうちに集まって楽しくお話ししているわ。
私には関係ない話よ。
でも私も楽しく一緒にそこにいるの」

などと言っています。
私は大きくなって結婚して子供を産みました。

そんなある日のこと、戦争がはじまりました。

飛行機がたくさん飛んできて爆弾を落としています。

自分が住んでた海辺は大丈夫だったのですが、

近くの海辺の町に爆弾を落とされたようで、

煙が上がっています。

変なおいもしてきます。

そして時々死体が流れてくるようになりました。

それはとても恐怖でした。

死体が流れ着くたびに、

私は言い知れない恐怖にさい悩まされたのです。

飛行機が来るたびに私たちは、

海のわきにある

自然にできた洞窟の中に隠れました。

私は赤ちゃんを抱えていて、

その生活はとてもストレスでした。

でも私の住んでたあたりは

爆弾が落とされることは一度もなく、

そのまま戦争も終わり、

また平和な時間が戻ってきたように思えました。

私はそのまま特に理由もなく死にました。

その後、私はあの世に行きました。

自分の人生を振り返ってみます。

「わたしは小さいころは
あんなにキラキラしてたのに。
あんなに生き生きとしてたのに。
なのに戦争が始まってから、
私の感覚は死んでしまった。
その後は私は自分の感覚を遮断して
私は自分の牢獄にいた。
もう楽しいと思うことも、
悲しいと思うこともない、
そういう牢獄です。
一度その牢獄に入ったら
容易に出ることはできません。」

私はここまで語ると、
私は「はっ・・・」と息をのみました。

驚くような光景が目の前に広がったのです。
それは人の顔という顔。

たくさんの人の顔。

それもみんな目が死んでいるようでした。

能面のように感情のない顔が
ひしめき合っていたのです。
そのたくさんの顔の上に

「魂の自由を失った」

という巨大な文字が浮かんでいました。

私は絶句しました。

ものすごい心にショックを感じました。

と同時に、過呼吸と号泣とで、

どうにもならない状態でした。

隣でセラピストさんがあわてている様子を

意識の遠くで感じました。

「これは震災でショックを受けた人たちの、
生きている人の意識の集合体だ」

と私のハイヤーセルフが言いました。

「人はあまりのショックを受けると、
心が動かなくなる。

そうした無数の魂の集合体があるんだ。」

私はその光景を見て

声を上げて泣くしかありませんでした。

魂の自由を失って生きることは、
生きていながら心を失ってしまうということは、
それは牢獄に入るよりも辛いことなのです。
それは何の感動もなく、
心が動くことがない。
それは魂の自由を失った状態です。

革命家エリックだった私は
「自由を！」
と叫んでいました。

世の体制が変われば自由が得られると思っていたのです。

でもそうではありません。

人生に本当に必要なのは、
「魂の自由」
だったのです。

ハイヤーセルフが私に言います。

「お前は見ないようにしていたんだ。
本当は知っていたくせに。
でも、今日、お前は見た。
これを見た。
もうわかっただろう。
自分のすべきことをしなさい。」

「いえ、
私はこれを受け止めることができません。
私にはできない！」

私はこの光景を
とても受け止めることができないと感じました。
直視もできないし、
触れることもできない。
その生き地獄のすさまじさを、
こんなにリアルに感じる事が
今までなかったのです。

震災のすごさは
私たちは嫌というほど感じました。
テレビでも散々報道されました。
大変だ、ということはわかっているけど、
それはいつでも
肉体という殻の中で感じることであって、
真の辛さや悲しみを、
震災に合わなかった人は
魂でわかることはできないのです。
当事者でなければ
分からないことがたくさんあると思います。

ですが、私はこの時に
催眠の中でその震災のショックを受けた魂に、

肉体がない状態でぶつかってしまったのです。
それは本当にショッキングな体験でした。

「私には何もできません。できません・・・」

見るとそこには
ハイヤーセルフの優しい瞳がありました。

「私はいつもお前とともにいる。
これまでも、これからも、
ずっとお前とともにいるよ。」

旅は続く・・・

私はこの数々の体験のあと、
自らがヒプノセラピストになりました。

自分で見ただけでは飽き足らず、
他の人の前世も
一緒に体験したくなったからです。
今、いろんな方の前世を
一緒に旅させていただいています。

ヒプノ体験は、
それを繰り返すことによって、
最初は悩みの解決に

有効だったかもしれない前世体験が、
そのうちに自分の
本当の使命を知る旅になると思います。

それは小さな自己、
小さな「私」という存在を超えて、
時間も空間も超え
「私」という魂に本当に刻まれている存在理由へと
繋がる旅だと思います。

ヒプノというのは大概において、
思い癖の改善とか
トラウマの改善、
精神的なブロックを外す
とかいったことにおいて
使われているように思います。

前世療法というと、
とてもスピリチュアルな領域のように
一瞬感じますが、
その目的は輪廻の解明ではなく、
心理学的な思い癖の改善
というのが主なる目的となっています。

ですが、私は、私というクライアントは、
精神的な何かを改善するためとか、
現実的何かを改善したいと思って

ヒプノを受けてきたわけではありません。
それは付随的に自然と改善されてきましたし、
効果はあったと思います。

ですが、私はそれが目的ではなかった。

私は、もっと本当のことが知りたかったのです。

命とは？

魂とは？

私たちは何者なのか？

といったことが知りたかった。

そして私は予想を超えた体験をしたのでした。
それは、自己という小さな枠からより
広大な自己の意識の旅へと誘いました。

プリアーダス星団の話はその後まだ続いています。
その話については続編にて執筆したいと思います。

私たちはまだまだ知らないことがたくさんあります。
ありすぎるほどです。

今までのヒプノが心理学的であり、
前世という体験が
心の残影でしかないという規定概念を超えて、

これからのヒプノは、
人類の意識の未知なる意識の発見、
宇宙意識の発見となるような
大きな可能性があることを
私は確信しています。

そして、ヒプノは容易に
その体験ができるというところが
とても魅力的だと思います。

あとがき

この「衝撃！前世療法・ヒプノ体験記」は
2013年の2月に執筆しました。
私がまだ駆け出しの
ヒプノセラピストだった頃です。

あれから、
もうすぐ8年になろうとしています。
私はこの8年間、
ひたすらに
ヒプノセラピストとして走ってきました。

沢山のセッションをし、
沢山の講座をしてきました。

私はずっと追い求めてきました。

人の問題はどうしたら解決できるのか。
ヒプノの可能性はもっとあるのではないか。
どうしたら真理に真実に辿り着けるのか。

私はいつでも
お客様に支えられてここまでできました。
まだまだ新米だった頃から、
私を信頼してくださる方々が、
足しげく銀河教室に通ってくださり、
私は、お客様の期待に応えたい思いで、
ここまで走ってきたように思います。

私は人生について考えるのが大好きなのです。
人生をいかに生きるのか、
人生をいかに生き、そして死ぬか。

そして、誰かと
その感動を分かち合うのが大好きなのです。

2017年に私は、
一旦、真理の核心にたどり着いたように思いました。

それを元に、
2018年6月、私は意識の旅研究所・銀河教室を
一般社団法人・意識の旅研究所とし、
人の心理と真理のための研究を
さらに推進しています。
お陰さまで、意識研は今や、
素晴らしいヒプノセラピスト集団となっています。

2020年、
私は再びこの体験記を公開したいと思いました。
新型コロナが世界中に流行り、
世界の常識がどんどん刷新されようとしている今。
2020年12月には、
土星木星の水瓶座入りももうすぐです。
もう、水瓶座時代は、すぐそこ。
さらに時代は加速して変化を遂げるでしょう。

しかし、世界がどんなに変わろうと、
あなたの中の神話は、
あなたの中で、
永遠に変わることなく、
燦然と輝いています。

私達の魂には、
自分にしかわからない、
神話が鳴り響いているのです。

その自分の神話に触れた時、
あらゆる謎が解ける瞬間が来るでしょう。

さあ、その神話は、
ずっと、あなたに紐解かれるのを待っています。

全ての鍵を握るのはあなた。
世界の秘密を握っているのは、
誰もいない自分自身なのです。

2020年11月1日 自宅にて。